

2008年

8月13日(水曜日) - 生をいただいているよろこび「お盆に思う」 -

今年もお盆の時節となりました。お盆には、祖霊をお迎えしご冥福の祈念とご供養をかさねさせていただきますが、ご先祖様の御恩徳への深い感謝とともに、命のお繋がりいただき今自らの「生」をいただいていることへの感激と慶びに思いを深くせざるをえません。

人は誰であっても生物的に父母があり、父母はまた同じく父母を…というご縁のつながりの中で、100年前も、千年前も、1万年前も、そして100万年前でも、命のつながりの縁は途切れていません。命の縁がどこかで途切れていれば当然に今はなく、今の人間の形ではなかったでしょうが1億年前ですらそうであり、悠久からの連綿とした命のご縁の気が遠くなるほどの蓄積として今があります。単純な、同時に厳然たる事実ですが、このことに思いを寄せるだけでも、一個の「生」を今いただいて今ここに在ることの、文字通りの有り難さ、尊さ、そして慶びが、ことのほか深くよく感じられます。

そして同時に、人ひとりの命、「生」には、その誕生までにどのくらいの父母、そのまた父母父母…の命が重ねられているのかと思うと、10世代300年さかのぼるだけで約千人(2の10乗)、20世代600年で約10万人、30世代千年で約1億人…、このように数えてみるだけでも、膨大なかずの祖先の命を紡ぎ重ねていただいた末のかたち、生命として、今の自分があることに気づきます。それゆえにも、命には、終わりなき数にものぼる、その人の祖先それぞれの命の個性、特性のきらめきを、もちろん一部未だ覚醒しないまでも、すべて限りなく遺伝子などとして確かに宿している、と理解するだけで、人には「無限の可能性」があると率直に思う。一つの命は、かけがえのない尊さの中で、限りない可能性に光り輝いています。

そんなことを自然思うようになって、人にとって何を「する、為す」のかということももちろん大事ですが、それ以前に、人として「ある」、「今ここに在る」というだけで、この上なく尊く、喜ばしいものだと思えるようになり、つくづく、今ここに「ある」という、奇跡のようなよろこびを、深い感謝とともに、ずっと大切にしていきたい。